

やすらぎ



「歎異抄」(第二十五回)

標 暁 講述

「歎異抄」 第十二章 続き
 たとい諸門こそりて、念仏はか
 いなきひとのためなり。その宗、あ
 さしいやしというとも、さらにあ
 らそわずして、われらがごとく下
 根の凡夫、一文不通のもの、信す
 ればたすかるよし、うけたまわり
 て信じそうらえば、さらに上根の
 ひとのためにはいやししくとも、わ
 れらがためには、最上の法にてま
 します。たとい自余の教法はすぐ
 れたりとも、みずからがためには
 器量およばざれば、つとめがたし。
 われもひと、生死をはなれんこ
 とこそ、諸仏の御本意にておわし
 ませば、御さまたげあるべからず
 とて、にくい気せずは、たれのひ
 かありて、あたをなすべきや。

(真宗聖典六三二頁)

いやし(卑し)とまで云われて
 争わすいられるかどうか。「さら
 にあらそわず」というのは「決し
 て争わない」ということ。「下根
 の凡夫(略)信すればたすかるよ
 し」というのは機の深信が徹底し
 ている人の言葉です。下根の凡夫
 というのは、宗教感覚とか実践能
 力の劣ったものという意味です。
 又、一文不通のものとは、教育を
 受けたけれども、教えの本当の深
 い意味が分からないということ。
 そういうものが本願を深く信ずる
 ということで救済される。
 仏教には八万四千の法門とい
 うのがあわけですが、それぞれ教
 えの特徴があります。積尊の教え
 といつても一通りではありませ
 ん。念仏以外ですぐれた教法はた
 くさんありますが、私自身にとつ
 ては自分の能力が及ばない。つま

光照寺寺報
 発行所
 宗教学人光照寺
 〒331-0821
 さいたま市北区別所町102-2
 電話：048-651-2781(代)
 FAX：048-651-2753
 E-mail
 yasuragi@beige.ocn.ne.jp
 ホームページ
 http://www8.ocn.ne.jp/~koshoji
 発行人
 池田孝郎

り、精神統一の修行をしてさとり
 をひらく、無我になりきる。そう
 いうことは私の実践面において器
 量も及ばない。二章の「いづれの
 行もおよびがたき身」という言葉
 と対応します。

生死とは迷いということ、ち
 よつとので解決できない根深
 い迷いです。阿弥陀さま、お釈迦
 さまだけでなく、一切諸仏の御本
 意として「生死をはなれる」とい
 うことがあります。だから、立場
 が違うと、優れた劣ったというけ
 れども、生死をはなれるという目
 的は同じなのです。

相手が憎いことを云つても憎む
 気持ちをおこさなければ争いもな
 い。その通りです。しかし、自分に
 降りかかる問題において、はたし
 てどうであろうか。勝他のこころ
 で振り回されているようでは、機

旅行記
 春季彼岸会法要 三月十日(金) 一時三十分 厳修
 詳細は三頁
 詳細は九頁



年頭法話



修正会

の深信が徹底しているとは云えな
 い。そういうことが問われている。
 (当寺) 法話抜粋要約、文責副住
 職 釈徹照) 次回へ続く



昨年はアメリカ発、サブプライムローンの問題で百年に一度に値する、直下型地震に喩えられる、世界経済の危機に遭遇し、立ち直すに十年を要するといわれ、国内もその余波をまともに受け、大企業は人員整理、生産縮少し、非正規社員が解雇され、この寒空に働くところもなく、住むところもない状況に追い込まれている現状であり、中小企業にも及び倒産する企業が続出して、生活そのものの基盤が揺ぎ不安な世情となっております。

住宅ローンが証券化し、永遠に

右肩上がりに上昇していくとする欲望の仕組みは当然いつか破綻することは予測される筈なのに、自由経済に規制を加えない論が正論としてまかり通って来た、強者の論の破綻を窺うことができます。

近代経済学は高度に、精緻に発展して来た今日、古典経済学の、アダム・スミスの「国富論」中の言葉、「神のみえざる手」を想起いたします。人間の強欲に対する、神のみ手による戒めとも受け止められます。しかし、いつも苦しめられる側は弱者側。今日、「勝ち組、負け組」が蔓延る風潮がおもいやられることです。

中国の故事に、「人間万事塞翁が馬」があります。吉凶、禍福は予測できない喩えです。この故事の物語りの筋は、逃げた馬が駿馬を率いて戻り、その馬に乗った息子が落馬して足を損じ、そのことよって、徴兵されず生きながらえたとする話であります。

「人生は麻なえる繩の如し」という喩えがありますが、吉凶、禍福はまさしく「麻なえる繩の如し」であります。何が良いやら、何が悪いやら人智を超えた人生そのものであります。人生は「登り坂、下り坂、まさかの坂」が出現し、喜び、挫折し、絶望して織りなされる現実です。

昨年の年の一字の表現は、「変」でありました。「変革」、「変動」、「変化」を表わしています。

この変化する激動をどう受容して人生を歩むことが出来るかが常に問われます。細川巖先生は「人生を結論とせず、人生に結論を求めず、人生を浄土の縁として生きる」と申されました。誠に格言であります。私ごとですが、若い時、「清濁合せ呑む大度量」と自分にいきかせ、ついには自ら破れ、念仏の教えに遇い、歎異抄の言葉、「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり」、「よろずのこと、みなもつて、そらごととたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」(後序)。「念仏のみぞまこと」の言葉に遇い、人間の迷妄性、愚かさ、罪業性を深く自覚せしめられ、自ら、慚愧、懺悔し、仰ぎみる世界を、如来浄土と頂き、衆生を見捨てたまわぬ如来のお心、大慈、大悲心に包まれていたことを我が身に知ったことであります。

人間の善悪、度量には限界があります。如来の大善、大功德、如来の大度量(誓願力、本願力)を回向されて、はじめて、愚悪の凡愚が、如来に全託して歩む世界を賜わったことであります。如来のお心は「海の如し」、「母の如し」。

鈴の音

人間は死を抱いて生まれ 死をかかえて成長する。

信國 淳(信國淳選集)

真の依り処

親が自分の子供を幼稚園や学校で友達が出来ないのは問題ありと言うのは誤解しているのではないでしようか。それはある学者の言うことで、根拠がないと思います。専門家はあなた自身、たった一人で、いい親でいたいと思ひ、その時いつも思ひた事を一生懸命やれば良いのではないでしようか。考えることによつて親が育てられ、周りから育てられていくことを感ずるでしょう。幼児期から絶対一人では生きられない事を教え、親、先生、友達に感謝させることが何より大切だと思います。千人は千人、百人は百人の中の一人で、最も大切ないのちを頂いていること。人に迷惑かけてはならないと身で感じさせ、感性と情念を育むことが大切であると思ひます。

岡田ノリ子

平成二十年十一月一日〜三日 「光昭寺 秋の京都旅行 帰敬式および真宗本廟お持ち受け上山」参加者の方々の感想をお寄せいただきました。この紙面をお借りして御礼申し上げます。

帰敬式とお持ち受け上山

川 澄 英 明

光昭寺の平成二十年秋の旅行は帰敬式と真宗本廟お持ち受け上山を兼ねて、十一月一日から二泊三日で実施されました。

私は思いがけなくも旅行の幹事長を仰せつかり、山田邦興さんと淡海さんが幹事に加わって下さいました。私は科学機器業界や寄居町商工会、光技術工業団体などで旅行幹事は度々経験していますが、これらでは参加者が企業人であり、各企業を代表している方達なので大変まとまり易いのです。



とこの

が、この度は年齢の幅がお子さんから年配者まで、また生活環境や職業も異なる方々で、まとめて行く自信が無かったです。

しかし、準備段階でバス会社や宿泊先、食事先などとのやり取りを幹事全員と光昭寺とが共有できるように、すべてEメール連絡でオープンにするよう心がけました。この段階で幹事さんと住職、副住職が素早い対応をして下さり、しかも準備期間に余裕があったので、大過なく旅行を終了することが出来ました。特に一緒にフォローして下さった幹事さんと副住職に、また予算や保津川舟下りのご提案などでいろいろご配慮くださったご住職に感謝申し上げます。

私の本廟上山は三度目になります。が、真宗門徒として東本願寺に詣でることは大変嬉しくもあり有り難いことです。こんな感動することはなかなかありません。まだの方は、是非



(編集長 副住職)

非次の機会に参加されることを心からお勧めいたします。

今回、幹事長を務めさせていただいたのは阿弥陀様のお導きであり、中身の濃い勉強をさせて頂いたという充実感が今でも残っています。

合掌

法名拝受旅行記

木 内 志保子

平成二十年十一月一日から三日の日程で、行って来ました。事前研修が、光昭寺であり、住職さんが、一生懸命考えて下さった中から、希望の法名をいただいたのです。そして、京都の御本尊で、帰敬式を迎える事が出来ました。

翌日、瓦ぶきをしている現場を見学。屋根の造作の美しさに感動しました。完成後は、間近で見れない訳で、良い思い出になりました。三日目の京都観光は、保津川舟下りと、天龍寺の庭と昼食が、圧巻でした。舟下りで、行く手に見える北山杉の風景が、東山魁夷の絵にそっくりで、感動したり、ジェットコースターをすべり下りるスリル感を味わったり、すっかり童心に帰り、楽しみました。



た。

天龍寺の庭は、聞くに違わず、心が洗われました。昼食は、庭の一角にある『篩月』

で、見事な精進料理を食しました。聞けば、あれもこれも、住職さんの計らいとか。本当に良い思いをさせていただき、有難うございました。帰路の車中では、楽しみにしていた京都駅弁を食し、お陰様で、充実した旅を過ごせました。



感想文

北 川 宏 源

私の光昭寺さんへの機縁は主人の実家が、浄土真宗で、主人が勉強したいとの事でした。私が電話帳で調べたら光昭寺さんが見つかりました。主人と共に浄土真宗を受けついでいきたいと決心致しました。去年主人が帰敬式を受けました。この本山へ奉仕団として主人と参加出来た事は、主人の故きご両親も喜んで下さっていると思います。聞法にまだ浅い私が光昭寺さんのお陰で帰敬式を受ける事が出来ました。当日の帰



敬式で、足がカタカタふるえ、感動の涙で、南無阿弥陀佛」と自然に合掌出来ました。帰敬式は真宗門徒として、これから

からの第一歩であるとのこと。

皆様方と共に親鸞聖人のみ教えを頂く聞法を続ける事が大事であることを認識致しました。教導の藤場芳子先生の法話で「仏弟子として新たななる自覚に立ち初め感動忘れず、真宗を学ぶのではなく、真宗に私が学ぶことが聞法である。宗とはハートの胸に通ずることである。真とは仮りのもの、うそのもの、真実を気付かせてくれるものです」とのお話を頂きました。形にとらわれない教えも浄土真宗の教えだと感じ取りました。また、今回の上山では、阿弥陀堂参拝、諸殿拝観など東本願寺の莫大な大きさに感動致しましたし、お食事では西本願寺のお食事、天龍寺での精進料理がおいしかったです。光照寺さんで私達のためかなりのサービスをして下さったのでしよう。



池田住職さんのご家族の徳の深さを感じさせて頂きました。同時に今

回の上山と帰敬式は生涯忘れられない一つとなりました。重ねて御礼申し上げます。今回幹事の川澄さんと淡海さん、山田(邦)さんには大変お世話になりました事、心より感謝を申し上げます。私の御礼の感想文に代えさせていただきます。合掌

帰敬式を受式して

後藤 決子

まず初めに、ご住職様はじめご門徒の皆様方にお見守りいただきまして、厳肅な帰敬式を受けることができましたことに、心から御礼を申し上げます。

光照寺様とは、夫が亡くなり

た時に、浄土真宗大谷派のお寺様というご縁をいただきました。

親鸞聖人様のみ教えは、婚家の宗旨という事だけでなく、「弥陀の橋は」という本を読んで以来、心に柔らかく受け容れることが出来るようになりました。そんな折りに、帰敬式のご案内

をいただき

まして、こ

れまでの人

生、恥ずか

しながら、

ほとんど無

宗教といっ

た生活だっ

たことを想

い、遅れば

せながら、

御仏とも

にある暮ら



しをしたく思いました。ご本山、阿弥陀堂で「南無阿弥陀仏」の声明の声に包まれているとき、囚ら

ずも、私が九歳のとき死別し

た母の「南無阿弥陀仏」の声が重な

ってきたのです。

戦時中で食糧の乏しい時代に、食べ盛りの兄三人のお腹を満たすため、母は毎日、家庭菜園で農作業に励んでおりました。一日の最後、寝る前に未っ子の私を抱いて、「南無阿弥陀仏」を称えておりました。六十年余も経て、母の声が甦るとは！脈々と慈愛の心に包まれて来たのかと、感無量になりました。

また、夫は病床で「南無阿弥陀

の書と、小さな『涅槃図』を枕元に

欲しいと申しました。本当に信頼で

きる心の平安は結局ここにあるのか

と感じました。

これからは、帰敬式において賜り

ました法名「釈尼光決」として、仏

法聴聞に励み仏弟子として歩んでま

いりたく存じます。

未熟者ではございますが、ご指導

を賜りますようお願い申し

上げます。

帰敬式と京都旅行

佐々木 みつ

今回光照寺様から帰敬式のお誘いがありました。ここ数年待ち遠しく思っていましたので、是非参加させて頂いたいただきたくお願い致しました。毎日が不安と迷いとお虚しさの中で生きる事の苦しさを、聞法会に出席しては答えを出してもらいますが、心の奥に落着かない物があります。

でも帰敬式のご案内、住職様の学習会とお話を聞かせてもらい、念仏し、自覚して本山上山できました。これは本心にうれしく思いました。はじめての京都ですので、心躍る出発です。

十一月一日より真宗本廟において帰敬式を迎えることができました。荘厳な阿弥陀堂では晨朝参拝の後厳肅な空気の中で法名を賜りました。生きている今、大勢の僧侶の方のお経を聞き、剃刀の儀式に出逢い、仏弟子とさせて頂きました。

同行し

て下さっ

ている皆

様方から

「おめで

とうござ

います、

といわれ

感動の涙

が止まり

ませんで

した。如

来の本願

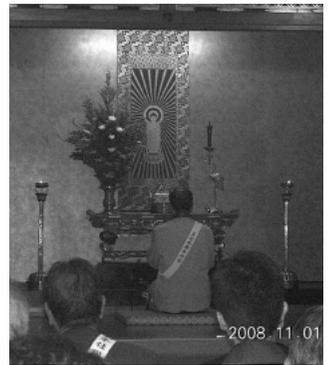
に依って





生かされて行くこの命、釋尼慧光という名告りに恥じぬよう残りの人生を大事に、安心して三室に帰依する精神生活を送れるよう聞法に励みます。

この度、印象に残りましたことは教導補導の先生方のお話でした。邪見橋悪悪衆生のごとく真宗の教えを受けること、枝や木だけを見て根っこに何があるのかを考えることだ、と聞いて、仏弟子となった今日からは、感謝の念仏で教えに生きる喜びを見つれることだと思えます。又補導の先生の諸殿拝観のご案内説明に深く感謝しお礼申し上げます。日程



の中に調声、感話の時間がありました。忘れられない緊張と恥かしさでしたが耳許で如来様の声に励まされ助けられました。最終日には舟下り、京料理、市内観光を楽しませて下さり、光照寺様、幹事の皆様にお礼申し上げます。ありがとうございます。

合掌

お待ち受け上山と京都の旅

太田 廣 彦

昨秋の聖人七百五十回御遠忌お待ち受け上山の旅は、天候に恵まれた真宗本廟参りでありました。

光照寺団一行は、同朋会館で朝夕のお勤め、お話、清掃奉仕からお念仏の教えを、身近にいただくことができました。

三日目の保津川舟下りは、早めの紅葉ながら素晴らしいものでした。今回最も印象深かったことは、一日目本山講堂での夕事勤行に、突然調声を体験したことです。

補導さんより

光照寺団から調声人を出すようお指図でした。

経験の無い私は

とても答えられませんでした。池田住職さんの一誰



か「誰か」の声しきり。誰も答えず憎越ながら下手と失敗を覚悟した私は迷いつつも決心し手を挙げた。

ついに夕事勤行のときに至り、講堂段上に上り大勢のご同朋の前で、緊張して調声を勤めました。

終了後は反省しきり、失敗多く赤面の極みでありました。

合掌

二度目のお待ち受け

大塚 誠 一

二年前の上山以来、お待ち受け奉仕団として二度目の上山であった。

春の京都とはまた違う、秋深まる京都への御奉仕であった。

前回は、本山の屋根に使われている瓦を一所懸命にたわしで洗い、感慨深かったことを思い出した。今回は、なんと本山の廊下をふき掃除をさせていただいた。短い時間でありながら、「ああ、ありがたい。」と心の底からそう思った。

今回も、子供連れで家族で参加したので、自由行動の時間はありがたかった。(京都市動物園、平安神宮散策)最終日の京都市内観光も、秋の京都を味わい、楽しく過ごすことができた。

光照寺の京都旅行

大塚 陽 子

以前の光照寺の旅行でも京都旅行に参加したので、二度目の京都に今回も家族四人で参加しました。

前回の旅行は、親鸞聖人のご旧跡を巡る旅でしたが、今回は帰敬式と親鸞聖人御遠忌のお待ち受けとして本山に一泊し、二日目は西本願寺の聞法会館に宿泊し、最終日は、観光バスで一日京都市内を観光して楽しみました。

東本願寺の御影堂は、ご修復が終わっていないだったので、お参りできませんでしたが、ほぼ完成しており、きれいに瓦がふきかえられています。本山上に、また上山できてよかったです。

今回は、

二日目の夜に、私の小学校時代の友人も合流して、三日目の京都市内の観光を一緒にまわり、秋の京都を





満喫することができました。旅行を企画していた幹事さん、光昭寺には、楽しい旅を有り難うございました。

光昭寺の京都旅行

大塚 雄介 (小学二年)

ぼくは、京都旅行は二度目ですが、今回は帰敬式と本山のお待ち受け上山と京都観光の二泊三日の旅行に家族四人で、参加しました。

一日目は、同朋会館で結成式のあと阿弥陀堂に、お参りました。

二日目は、朝掃除をしました。そのあと、帰敬式の法名伝達式がありました。

三日目は、観光バスで京都市内の観光をしたり舟下りをしました。いろいろ行けて楽しかったです。ありがとうございます。

光照寺の京都旅行

大塚 真由 (五歳)

二日目の自由行動の時に行った、動物園と三日目の舟下りが楽しかったです。

また行きたいです。有り難うございました。



ありがとうございます。

岡田 ノリ子

真宗本廟奉仕団として、今回帰敬式に出席される方々と一緒に待ちこがれていました京都へ、親元に帰る気持ちで行って来ることが出来ました。お寺を初め、この旅行にお手伝い下さった人達に深く感謝申し上げます。本廟の奉仕団のテーマは、「願わくは、念佛に生き、浄土に生まれん」、教導の藤場芳子様、補導の柳梅智行様をお迎えしまして、大変充実した意義深い一泊二日を過ごさせて頂きました。御修復もかなり進んでおりまして、木造建築面積では世界最大の御影堂、明治十三年から十五年の歳月をかけ再建された全国



の先人の血の出るような協力、宗祖親鸞様に対する感謝が全てであったものと感じます。翌日は保津川の粹な舟下りを楽しみました。合掌

上山を御縁として

川上 蓮

最近皆さまと御一緒に無理かナーと思ひ、いやいやこれが最後かとも思う事が多くなりました。今回もそうでしたが本当にお世話さまになりました。何時も思うのですが余りの大きさに奉仕と言うのも名許りで唯ついで行くのが精一杯で、でも帰宅してからの感想は、あ、よかった、お話し出来てと感謝致しております。御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」、最初はどう頂いたらいいのだろうとよく分りませんでした。親鸞聖人は「本願力に値いぬればむなく過ぐる人ぞ無し」と、又、「本師源空いまさずば」と、本願念仏にお値い出来たことをとてもおよろこびになっておられます。この不毛の地と言われる関東に、否、聖人はこの地から出発されたともお聞き致します。聞法第一の御縁を頂



き感謝申し上げます。

京都旅行

窪田 剛之

「のぞみ」十一号定時発車一路京都へ。天気よし期待の東本願寺、西本願寺宿坊の旅。「のぞみ」は「ひかり」より速いとは目からうろこ。あつという間に京都駅に着く。東本願寺宿坊「同朋会館」にて結成式。夕事動行。二日目は朝の清掃、阿弥陀堂にて帰敬式、法名伝達式、後、御影堂の清掃、腰痛をおして雑布がけに励む。奉仕活動の後のさわやかな気持ちはどこからくるのだろうか。みんな力で力を合わせ便所掃除、食事当番等各分担してやった結果なのか。佛様に少しでも奉仕が出来た喜びだった。御影堂の修復現場での巨大な工事にびつくり。本廟を辞して「渉成園」の茶会に出席、秋の静寂の衣服はまさに心なごむ一時。聞法会館に宿泊、翌日の保津川下り、天龍寺参観と秋を満喫する。企画実務をしてくれた関係各位に感謝するとともに今回ほど楽しく有意義な時間を持つたことに合掌。



上山が叶った機縁

北川 美智雄

私は過去、真理を求めた他宗教に別れを告げて魂の故郷ともなっている光昭寺の本堂で、昨年二月帰敬式の受式をさせて頂き、今回の上山の折、妻が受式させて頂きました。夫婦揃っての上山達成は南無阿弥陀佛で表現出来るものです。今から六十年前、北海道で小学生の時、亡き父の還暦旅行から帰った父母から『京都東本願寺に泊って来た』と留守番をしていた私に、感動の土産話をしてくれた事を、同朋会館へ泊った夜想い出し懐かしい体験でした。池田住職が、私に『海から故郷の川へ匂いを嗅いで、真宗へ戻ってきた鯉かも』と冗談を言われる事が、最近本当の様な機縁を感じます。こんなご縁を大切に今後も聞法に精進させて頂き二〇一一年宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要の上山を心待ちにしております。後記となりましたが、



今回の旅行の中味は企画された役員幹事各位のご苦労です。素晴らしいもので感動一杯でした。西本願寺での会食宿泊や天龍寺



往復新幹線のぞみ号で帰宅の途に着けたのも、阿弥陀の慈悲と厚き信仰深さの皆様のお陰だと合掌すると共に、役員幹事の方々に重ねて御礼申上げる次第です。合掌

藤場芳子教導のお話

佐々木 玄 吾

光昭寺奉仕団が集う部屋で教導の藤場先生は「根のない木に似たり」と黒板に書いて話を始められた。この言葉はお彼岸の御文(蓮如上人の中にあるそうで、自坊ではこの御文をお彼岸には必ずあげて住職が御法話をされるそうである。この御文を頂くと枝ぶりばかり気にして根を大地に伸ばすことを忘れていて根が反省させられる。根も大地に伸ばすとはどうすることであろうか。それは念仏の教えを聞いてそれを他へ伝えることであると話された。

それがとてもむずかしい。私においては、家庭で朝夕勤行をし、お寺

での精進料理の御馳走、涉成園のお茶会の体験や貸切り舟での保津川下り等三日の日程は、短かく感ずる程で、全員無事

感謝

田中 淑彦 光子

この度は京都上山旅行に参加させて頂いたいただき有難うございました。東本願寺にての朝の読経、清掃、建物の立派さの見学等貴重な心清まる体験をさせて頂きました。翌日の保津川下り、嵐山天龍寺のきれいな庭、食事等々京都の京都らしさを充分に御案内いただき、又同行の方々も私のような者にも温かく接して下さり楽しい旅行をさせて頂いたいただきました。有難く感謝致します。

光昭寺京都旅行に参加して

谷口 幹雄

実際の東本願寺を目の当たりにして、その規模の大きき、驚くと同時に歴史的な背景を感じることができ、大変有意義に過ぎず事ができました。同朋会館で



は寝食をともにしての朝夕のおつとめ、おはなし、清掃奉仕等々の時間を過ごす中で、参加者同志の親睦が

できたのと同時に、親鸞聖人と浄土真宗をより身近に感じる事が出来る様になりました。最終日には景色の美しい保津川下りも計画頂き、京都を別の角度から知ることができ大変よい経験となりました。初めての参加で不安もありましたが、皆様にお世話頂き無事に旅を終えることができました。本旅行を計画頂きました光昭寺の方々には大変お世話になりました。

念仏の友の誕生に同行して

淡海 雅子

新しい仏弟子が四名誕生された喜ばしい上山であった。同朋の後姿を眺めながら、帰敬式を受けた当時のことを思い出した。主体的に教えを聞いていこうという気持ちよりも、不安定だった自分を何かに支えてもらいたいという期待感で帰敬式を受けていたが、思えばあの時が私にとって生き方の変換点でありスタートでもあった。

藤場先生の御法話は家族の問題や

人間関係の苦悩も自己中心的な思いで推し測るゆえに生ずる。問題は他者にあるのではない。凡夫の自覚が徹底できず自己の欲求を正義であるかのように言い放つ私にあると同じ女性の目線で話してください。師や同朋を通し如来に照らし出され、お念仏できることが何事にもかえ難く嬉しかった。

本山上山と、京都観光への旅

山田 邦興

十一月一日〜三日、二泊三日の旅(本山上山・帰敬式・観光と三つの目的)に参加。真宗本廟奉仕団として、同朋会館に宿泊。何時もの日程に更に帰敬式が加わる。

修復中の御影堂の現場視察も。

本山を訪れる度に思うのだが、本山の格式・静寂さに感動。講義・座談では、皆様の意識の深さに感心し、聞法等、日頃の怠慢な態度を反省する事頻りだ。

四名の方が帰敬式・法名伝達式を受け、緊張した面持ちが清々しい。



現場視察で、御影堂の修復の立派さに良くもここにまでと感動。次の宿、西本願寺聞法会館へ。一寸し



一歩引き寄せられた感動の旅であった。宗祖親鸞聖人に訪ねた。合掌。

— 今現在説法の聖人御真影 —

住職 池田 孝郎

この度は四人の方々の帰敬式、第二回目のお待ち受け総上山、光照寺恒例の御旧跡を尋ねる旅の三つを兼ねた、豪華で重要な意味と願いを持った京都でありました。

帰敬式に臨まれた四人の方は事前(三回)の学習を経て、法名を選定し、晴れて御真影の前にて仏弟子となられ感激でありました。

お待ち受け上山は二回目であり、講師は、前回は望月慶子師、今回は藤場芳子師。お二人は当代きつての女性講師。誠に縁でした。藤場師より「フー(普通)」の正当化への警鐘を教えてくださいました。旅行として、保津川下りは絶景で、

たホテル並みだ。翌朝、保津川下り船旅を楽しみ、天龍寺で精進料理を。青蓮院等、親鸞聖人ゆかりの地を訪ねた。

宗祖親鸞聖人に訪ねた。合掌。

絵画の北山杉を想い、天龍寺の禅味を味わい、青蓮院では聖人の植髪堂、秘仏本尊の熾盛光如来を尋ね万感の憶いでした。合掌

照らされた自己

坊守 池田 邦子

去る十一月一日、本山瓦御修復工事も着々と進み完成間近かのこの日、見上げた大屋根の下、何と小さく浅ましく傲慢で、我欲に満ちた我が身を思い知らされた到着第一歩でした。

御同朋の方との旅行も一日二日目と、あつと云う間の日程をこなすだけで精一杯でした。印象は保津川溪流下りの飛沫を浴び船頭さんの櫓さばきの妙味は圧巻でした。

藤場先生のお話しを受けて、私なりの感動は「ここが浄土のど真中、



地獄一定住みかぞかし」ここに決着して教えに歩ませるて頂く事の大事さと、不足を云わず「ただ念仏」の世に生きさせて頂く事を痛感させて頂きまし

た。四名の帰敬式受式者の方、御同行の方大変お世話になりました。お礼申し上げます。有り難うございました。合掌



上山旅行記

副住職 池田 孝三郎

二〇一一年の宗祖の七五〇回御遠忌がいよいよ近づき、「お待ち受け」という呼称が身近に感じられようになりました。

今回の上山は、「旅行」、「帰敬式」、「お待ち受け」という三つのビックイベントが一つになり行われました。

三つの要素はどれも重みがあり、参加者二六名は各人の参加理由があります。共通しているのは、一人一人が念仏のご縁に遇っている、ということでしょう。

藤場先生の講義で「いよいよ根をはって聞法していく」というお言葉

を頂戴しました。ご縁を頂いたことで留まらず、根をはってこそ、と強く思いました。幹事さんをはじめ、参加者の皆さんと有意義な時を過ごせたことをここに感謝申し上げます。合掌

お彼岸



昨年、本山に上山して御影堂を見学した折、ご修復がほぼ完成していたことには驚きと喜びを感じました。

再建からおよそ一〇〇年の時を経て、今まさに当時の賑わいを待ちわびるかのごとく再生しようとしているのです。

又、ご修復の現場を目の当たりにすると、何百年という時を紡ぎ、そしてご縁が結ばれた多くの門徒（僧伽）の背景を偲ばずにはいられません。そういう意味において圧倒される思いを

抱くのですが、ただ単に本山は建物が大きいか、立派だというものではありません。この度のご修復は真宗七五〇年の法灯が確かなものとして伝承されていることの証明であると同時に、自分のもとへ教えが伝わり、お念仏のご縁をいただいていることの驚き、感動、喜びを確かめさせていただくことにはかなりません。

二〇一一年の宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌テーマは「今、いのちがあなたを生きている」です。このテーマを目にする度に「いのちが私を生かしている」「生かされているいのち」なのだということを確認するようになりました。というのも、いつしか自分で生きていくということに度々ど

春季 彼岸会法要

- ・3月20日（金）春分の日
- ・午後1時30分
- ～3時30分まで（1時受付）

- ・光照寺本堂にて
- ・勤行・法話

※準備の都合上、出席人数をご連絡下さい。預骨されている方は率先してお参り下さい。

ご参詣をお待ちしております。

彼岸参り

- ・3月17日（火）
- ～23日（月）の期間（但し20日は除く）

※ご希望の日にちをお知らせ下さい。時間につきましてはこちらで調整させていただきます。ご自宅か当寺のいずれかで読経いたします。

ひとくち 歎異抄

羅漢：この世に真はあるか。
「火宅無常の世界は、よろずのこと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」（後序）



聖徳太子は「世間虚仮 唯仏是真」と申され、三宝に依れと教示される。
川越喜多院の五百羅漢



報恩講 樫先生法話

ころか毎日おちいつているからこそ、気付かされるということがあります。
「他力の悲願は、かくのごとくいのちがためなりけり」といわれて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。」（歎異抄 九章）
亡き人を偲びつつご一緒に念仏申しましょう。

副住職（釈徹照）



報恩講感話





寺務所より

◆法要のご案内

●春季彼岸会法要

三月二十日(金)、午後一時三十分より厳修。

◆光昭寺護持会

平成二十一年度の護持会費の納入をお願い致します。

◆聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会
毎月開催。午後一時半～四時半まで。講師は樫暁先生。和讃を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。

●大経の会

二月十四日(土)、三月十五日(日)、四月十三日(月)、五月二十五日(月)、午前十時～午後二時まで。細川巖著正信偈讃仰(三)を学んでいます。お弁当持参して下さい。

●我聞の会

二月二十四日(火)、三月二日(月)、四月二十八日(火)、五月二十二日(金)、午後一時～四時まで。真宗の簡要を学んでいます。講師は住職。

●微風学舎

毎月開催。午後七時～九時まで。講師は副住職。「顕浄土」の教学を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。

●さいたま親鸞講座

二月七日(土)、四月十八日(土)、六月六日(土)、午後二時～四時まで。会場は大宮川鍋ビル。

●真宗のつどい

四月十日(金)、六月十一日(木)、午後一時半～三時半まで。会場は埼玉県内の寺院。ご参加の際は寺にご連絡下さい。

●お願い

ご自宅で法事の際は駐車場をご用意下さい。宜しくお願いします。

俳句・川柳

吉沢 光昭

友招き明後日届く新酒かな
また来ると冬芽に語り下山かな
大の字に秋天高き矢倉岳

西木 順子

関八州見晴台に小春あり
串刺の魚の塩味炉を囲む
ひたすらに神さびてあり冬の滝

花岡 要

友の喪に永年の不沙汰謝しにけり
葉牡丹に師走の日ざし澄みにけり
娘より歳暮の鮭の届けけり

布施 毅夫

いただきし林檎の愛の重きかな
落葉まふ対校戦の応援歌
枝撓む柿の豊作旧家あり

山田 恒

納骨や縁者と眠る師走かな
茅葺の廃家に散りしもみじかな
元日や吾が影法師のび盛り

釈 義深

修羅越えた男ほとけの掌に眠る
天寿全う凍てつく闇の流れ星

帰敬式昔の我と出会えけり
枳殻邸祝賀の宴の夢のあと
渡月橋迷子出る程賑わいて

短歌

布施 毅夫

車椅子の叔母と握手の挨拶に手の
温もりは消えがたくあり
握手した温もり冷めて霜月の朝に
身罷り佛の顔となる

夕月が半旗のように翻る米寿の逝
去を弔うごとし

極細のきりりと締った月ありて脇
を固める金・木星のあり

振り返る事務棟の上の寒空に今日
も誰かの念仏を聴く

片山 真紀

孫抱きカリフォルニアで見る月に
ふと口ずさむ夕焼け小焼け

枯れ庭のひときは紅き山茶花を一
輪活けて大掃除終える

薄れゆく記憶の中にまだ居りし娘
からの便り待ちわびる老母

篠原 潤子

大宮の公園犬と散歩する亀に鴨鳴
く鯉もむれる

分んのかヨ親に捨てられた子の気
持我にはむかう甥っ子がいる

資金難悩む弟目の前に責めてピン
タする我は鬼なり

夢の中弟の顔なつかしく我にむか
いてただ目で語る

誰にでも目が合ったならおじぎす
る義父の教えを有難く聞く

障子はる板の間みがく土間をはく
三年通いし古民家去る

結婚二十六年記念日に虎屋のヨウ
カン夫よりいただく

赤秀 品枝

みどりごよこの世に生まれ何を
願わくは美しきもの清きものをと

爺と婆並んでミルク飲ませおわり
ごとの重さに絶えかねて



梵鐘



花岡 要 画

食料の産地偽装、振込み詐欺、世界経済不況の年が暮れまた新しい年が巡ってきた。年初から解雇された派遣労働者の困窮ぶりがしきりに報道されている。アメリカ発の不況が急速に世界中を駆け回り、日本経済も購買意欲の低下と円高の影響で自動車などの輸出産業を中心に落ち込んでいる。

その企業たるや多額な内部留保を抱えながら派遣や季節工などの非正規雇用者を解雇し路頭に迷わさせている。企業には従業員の生活を守る責任があるのに、もの言えぬ弱者を切り捨てその社会的責務を全く果たしていない。

当然のことながら今の社会は一人では生活できない、相互依存で成り立っている。お互い思いやりの心が不可欠である。大乗の大船に皆が乗って安心して暮せる社会は望めないのだろうか、一人ひとりの行動が問われている。

釈 恒浄